

本年は、夏目漱石の没後百年にあたる。49歳で没しているから、来年は生誕百五十周年ということになる。漱石といえば小学校や中学校あるいは高校の国語の教科書で出会うので、現代の日本人にとって最もポピュラーな作家の一人であろう。

『吾輩は猫である』で遅い文壇デビューを果たすと、破竹の勢いで作品を発表していく。まさに次から次へと書き起こし、どれもベストセラーとしてヒットしていった。それまでの時代の文語体から、後に主流となつた口語体によつて書かれた作品たちは、読者にとって斬新かつ馴染みやすいものであつたろうと想像できる。

教科書で漱石の作品に出会つているから、名前こそ馴染み深いと感じているだろうが、漱石の作品の多くを読んだ、或いは全ての作品を制覇したぞ！という人は少ないのでないか。そこで、再び漱石へと誘うきっかけになればと、ミニ企画展を開催することになった。資料の展示にあたり、成田山仏教図書館から漱石初版本を、成田山書道美術館からは漱石の墨跡を出品していただくな。

帰國後、東京帝国大学や第一高等学校の教壇に立つ一方、暗い気分を吹き飛ばすために書いた『吾輩は猫である』が一九〇五年（明治38）年「ホトトギス」に発表され評判になり、『坊ちゃん』『草枕』などの傑作を次々と発表。近代人の悩みや人間の利己主義、矛盾などを深く追求した『明暗』を執筆中に49歳の若さでこの世を去つた。

学校図書館長 高橋春樹

## 『漱石への誘い』

ミニ企画展の開催にあたり

展示期間は、

5月6日(金)から21日(土)まで

# 図書館だより

2016年5月6日  
第92号  
成田高等学校  
図書委員会  
成田市成田 27



なつめそうせき  
(一八六七～一九一六年)  
**夏目漱石**

明治・大正時代の文豪・英文学学者。  
本名(金之助)。東京の名主の家に五男三女の末っ子として誕生した。

1歳の時には他家に養子に出された。9歳で実家に戻されたが、夏目姓に戻ったのは21歳になつてから。両親の愛に恵まれぬ幼少期を過ごしたことが、後の彼の作品に大きな影響を与えたといわれる。

東京帝国大学英文学科を卒業。愛媛県松山の中学校や熊本の第五高等学校の教師になり、さらに文部省に命じられイギリスに留学、ロンドンで英文学を学んだ。しかしイギリスの生活に馴染めない漱石は、下宿にこもつて読書にふけり、しまいには神経衰弱にかかるてしまう。

## 作品のあらすじ

読みじりに  
特色 など

### 『吾輩は猫である』

#### 【あらすじ】

吾輩は無名の猫。中学教師の珍野苦沙弥に飼われている。主人は骨弱のくせに大食漢、多趣味でなんにでも手を出しが、移り気でひつとも物にならない。吾輩の觀察によれば、人間ほど身勝手で愚かな生き物はない。我執と虚栄の張りあいで、無用のトラブルばかり重ねている。

主人の家に集まる人々も変わり者ぞろいで、金縫眼鏡の美学者迷亭、大学でレンズ磨きにいそしむ水島賽月、自称詩人の越智東風など「太平の逸民」たちが出入りして勝手な談論に熱をあげる。やがて、寒月の縁談で、金田夫人が現れて一波乱が起こる。彼女は偉大な鼻の持ち主で尊大をきわめ、実業家嫌いの主人がけんもほろろにあしらったことから、金田家の悪辣な嫌がらせが始まった。主人は、逆上面に逆上を重ね、奔命に疲れ果てたあげく、

愚者のたわごとにからかう心を動かすほどに惑乱する。

## ●漱石トリビア その1

### 【読みじり】

この作品の魅力はなんといっても、物いわぬ猫が人間を觀察し、批評し、諷刺するという趣向のおもしろさにある。人間にとつてはごくあたりまえの習慣や風俗であつても、それになじまぬ猫の眼にはもの新しく、また珍奇に見えるはず。漱石はそれを利して、人間生活の矛盾や滑稽さを拡大し、デフォルメして描いている。第七章で、猫が銭湯をのぞき見る場面もそのひとつで、赤裸の人間集団の混雜ぶりが誇張して描かれている。衣服を脱いでも、我執だけは捨てない人間の愚かさを彷彿させる場面。

### 【特色】

- ① 日本近代小説に類のない笑いの文学
- ② 滑稽と諷刺による近代文明の批判
- ③ 江戸の話芸の伝統を踏まえた語りと言語遊び



### 『坊ちやん』

【あらすじ】

物理学校を卒業して、四国の中學に赴任したが、我慢のならない教師ばかりいた。みえない教育論を唱える校長(狸)、氣障で策謀家の教頭(赤シャツ)、阿諛追従の画学の教師(野だいこ)等、俺はさつそく渾名を付けられた。生徒たちも陰険で悪質な悪戯ばかりして手におえない。宿直の夜、布団にバッタリを入れた奴がいて大騒動になる。赤シャツは

英國で留学生生活に馴染めなかつた漱石は、読書三昧の毎日を送つた。帰國後発表したのが『吾輩は猫である』。英國留学で心傷ついた漱石が、気楽によもやま話を語るスタイルで書かれた小説だ。単行本化にあたり、大いにこだわりがあったようで、留学中に親しんだ洋書のさまざまな要素を取り入れ、工夫を凝らした装丁で出版された。この装丁を依頼されたのは、当時「ホトトギズ」に挿絵を描いていた挿絵画家の橋口五葉だった。今回展示の「初版本」の装丁の多くが五葉の作品である。

同僚（うらなり）の美しい婚約者、マドンナに懸想して横合いから奪つたうえ、うらなりを転任させようと画策する。憤慨した俺は唯一頼もしい味方、数学教師（山嵐）と手を組んで抵抗するが、所詮は螳螂の斧でどうにもならぬ。山嵐は赤シャツの策略で追放される。辞職を決意した俺は赤シャツと野だいこの濡れ場を押さえて散々に打擲し、凱歌あげて「不淨の地」を去つた。

### 【読みどころ】

この作品は全部で十一章、導入部分と本部分と終末部分から成る。導入部分は第一章で、主人公の「おれ」が、四国の中学校の教師になるまで。子ども時代の意表をついたずらから始まる。

本部分は第二章、四国に船が着くところから。中学校の教師となると宿直をしなければならない。そのおり、生徒たちからいたずらをされる。

終末部分の第十一章で、清のことにふれて云つた。「坊ちゃん後生だから清が死んだら、坊ちゃんの御寺へ埋めて下さい。御墓のなかで坊ちゃんの来るのを楽しみに待っています」と云つた。だから清の墓は小日向（東京都文京区）の養源寺にある」で終わる。

### 【特色】

- ① 教師社会の裏表を鋭くついた青春小説
- ② ユーモアにあふれながら哀れさと人間味深い不滅の文学
- ③ 社会の不正を抉り弱者を庇つ痛快小説

（道後温泉本館）

## 『草枕』



### ●漱石トリビア その2

道後温泉駅の正面に「坊ちゃんカラクリ時計」がある。道後温泉本館の振鶯閣をモチーフにした時計で、軽快なメロディにのって時計台がせり上がり、小説「坊っちゃん」の登場人物が現れる。その横には足湯があり、いつも多くの観光客が利用している。



### 【あらすじ】

画工の「余」は「非人情」の旅に出る。観海寺の大徹和尚は修行さえ積めば旅などせんでも済むと説くが、「余」にはもとよりそこまでの覚悟はない。画工は山奥の温泉場で、出戻りの美しい女、那美さんに会つて、強烈な個性と不羈奔放な言動に驚く。彼は那美さんを絵にしようとするが、どうしても描けない。椿の花とともに、どこしなえに水に浮くという構図はどうに決まつたが、肝心の女の表情が定まらぬのである。

画工はやがて「憐れ」こそ、それに相応しいと思いあたるが、現実の那美的の顔はあまりに勝とう勝とうの気配が強すぎて絵にならない。ある日、出征する久一を駅まで見送るために皆で山を下る。久一を乗せて動き出した列車の窓から、零落して中国東北部へ行く那美の別れた夫が顔を出す。そのとき、茫然とする女の顔に「憐れ」が浮かび、「余」の絵は完成了。

### 【読みどころ】

この作品は、詩や絵画などの芸術がなぜこの世に必要かという問題を提起するところから始まる。事物の描写は見事であり、論理的に物事を考えたりする論説のほか、写生文・紀行文となつていて。

### 【特色】

- ① 教養豊かな画工の芸術論・人生論文学

- ① 女の哀しい運命を冷静に客観的に描く  
非人情小説  
② 澄んだ眼で物を観察することで俳句の世界につながる

## 『三四郎』

**【あらすじ】**  
熊本の高等学校を卒業して文科大学に入学した小川三四郎に三つの世界ができた。ひとつは母の住む故郷、遠くに振捨てた気の「過去」である。第二は広田先生や野々宮理学士のいる学問の世界、やがて入ってゆくはずの「未来」に属する。第三は燐として春のことく輝き、勝氣で美しい里見美禰子の君臨する青春の世界、三四郎にとつて焦眉の「現在」である。

三四郎は自分の運命が新たな友人・佐々木与次郎に拘えられているのを自覚する。彼は美禰子に向かってひたむきに進むが、所詮は「田臭」の男で、技巧にたけた彼女に翻弄され終わる。画家の原田に記念の肖像画を描かせた美禰子は、「われは我が怨を知る」と言葉を残して見知らぬ男に嫁ぎ、三四郎は完成した肖像画の前で「迷羊」という言葉を呟く。

『読みどころ』  
『三四郎』は十三章からなる小説で、日露戦争後、庶民の生活に翳りの見えはじめた世相を背景に、恋知りそめた青年と、青春の夢

から醒めてゆく若い女の出会いと別れが、これを批評的に遠くながらめる知識人の姿と対照して書かれている。

罪を感じ続けて、今まで死んだように生きてきた。そして、乃木の殉死を聞いて自殺する決心をした…。

- 【特色】**
- ① 曰露戦争後の世相を反映する現代小説
  - ② いわゆる漱石三部作の序曲をなす作品
  - ③ さ迷える青春…その出会いと別れ

## 『三四郎』

### 【あらすじ】

私は先生に惹かれ、帰京後もしばしば自宅を訪れた。しかし、先生には謎が多い。社会に出ようともせず、隠者のようにひっそりと暮らしている。あなたは今に私から離れてゆく、「自由と独立と口れ」を手放さぬ現代人は孤独と寂寥に耐えねばならない」などと語る

先生は、私にも容易に心を開こうとはしない。

大学を卒業した私は故郷へ帰った。病氣の父が危篤状態になつたとき、先生からの長文の遺書が届く。

以上5点の作品を紹介したが、他にも多くの著作があり、いずれも発表当時のベストセラー本ばかり。さあ、漱石本を手にして親しんでみよう！

### 参考文献 「日本文芸鑑賞事典」 の〇八の一

### 【特別展示】

#### ◆漱石墨跡

軸「惜花春起早 愛月夜寝遲」

菅虎雄宛書簡「挙啓 談書会の…」

(所蔵：成田山書道美術館)

#### ◆漱石初版本

「吾輩は猫である」「三四郎」「『三四郎』の美しいお嬢さん（静）を愛していた。同居していた友人のKがお嬢さんへの愛を告白したとき、私は彼を出し抜いて結婚を申し込んだ。私達の婚約を知ったKは何もいわずに自殺した。彼の死体の前で、私は自分の未来が失われたのを知った。私は深い寂寥と人間の

(所蔵：成田山仏教図書館)

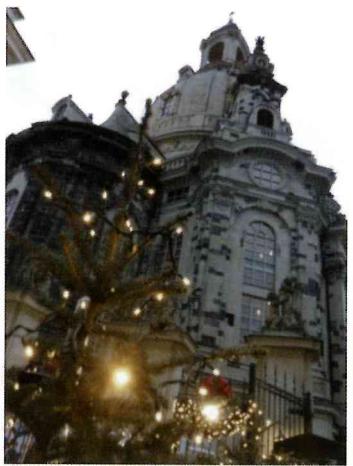
## 留学体験記

「留学をして今思ひ」と

三年F組 小林 佳晃

私は高校一年の八月八日から高校二年の六月三十日までYFJという団体を通してイスのチューリッヒという街に留学していた。前回、一年ほど前には、留学を決意したきっかけ、出発前の東京でのオリエンテーション、チューリッヒに到着するまでのエピソードを中心にして書いた。二千字ほどの誌面と限られているので今回は派遣先での様子と今思うことを中心につづる。もし興味を持ってくださるならアーカイブも読んでいただけると嬉しい。

(クリスマス間際の教会)



チューリッヒはどちらわけ美しい街だった。欧洲の水がめと言われ、豊かな自然が美しいのどかなイスの、湖のほとりにチューリッヒがある。遠くに悠久とそびえる山々の雪と氷河の白を、透き通る空の青が上下から対照して挟み、山々から流れる清らかで深く冷たい湖と、そこに生い茂る緑。まるでハイジの物語の世界のように原色が輝く風景に、旧市街の歴史ある歐洲的建造物が調和していて、そこに夕日の赤が差し込むと、スイスの規模を誇るにぎやかな都市の時の流れが止まり、

(風過ぎのチューリッヒ)



(通学路のバス停から眺める夕景)

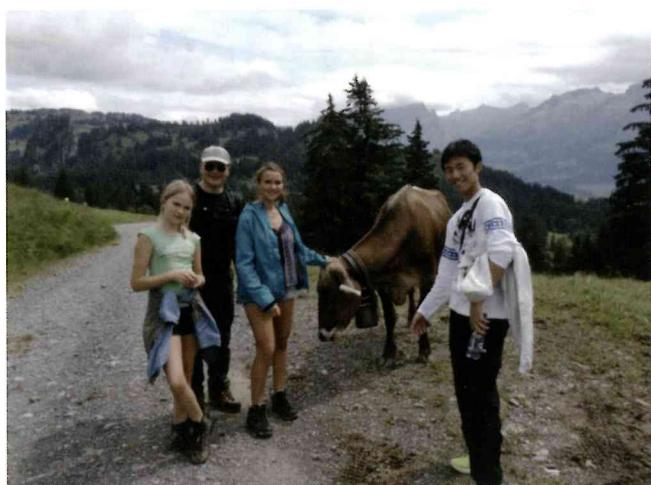
湖に浮かぶ白い鳥の水音が聞こえるほど静まりかえり、行く人は皆立ち止まって微笑みながら一瞬の幸せを大切に味わうように見入るのであった。故郷を遠くにもつ人であふれ、普段は様々な言語が飛び交う国際都市チューリッヒで老若男女誰もがオレンジ色に染められ、ひと時を共有する。そのとき私は直感的に、この成熟した都市の深さを垣間見た気がした。チューリッヒはそんな街だ。

成熟した社会には、社会の一時的な流行の風では飛ばされない深く根の張った教養と



豊かでおおらかな心を持った市民が住む。私のホストファミリーもそうだった。

(ホストファミリー)



私のつたないドイツ語でも真摯に耳を傾け、話し始めて気が付いたら二時間ほど経ついたこともあるほど誰に対しても誠実で心優しいマザー、職場には自転車で通勤し、新聞とコーヒーとラジオを愛する、寡黙で深い思考を持つファザー。私と同じようにYFIIでカリフオルニアに留学していた聰明なファーストシスター。バイオリンと乗馬を習い、ペットのウサギの世話を好きなど、まだあどけなさ

が残るセカンドシスターの中に私は暖かく迎え入れられた。テレビは無く、ファザーとファーストシスターがベジタリアンという独立自尊と自考自立に加え、お互いを尊重する個人主義を体現したような幸せな家庭から私は多くを学んだ。

個人主義と自由を重んじる文化のチョーリッヒの高校には部活が無い。そこで私はコミュニケーションチームの中から日本では縁がなかつたサッカーとダンスに挑戦した。サッカーでは、私はまるで周りに歯が立たなかつたが、それはチームに溶け込むのに全く関係がなく、私を熱烈に歓迎してくれた。

(サッカーのチームメイト達)



他にも国内外の旅行やパーティーなど、異文化の楽しいところだけを享受していく私にもきちんと困難はやってきた。学校生活につ

しく責めることや、納得のいかないコーチやチームメイトの指摘には選手が大声で反論することはざりで、相手の立場や年齢や技術によって自分の態度をえることがない。このように個人主義と主体意識にしつかりと基づいた組織では、体罰などは入り込む余地がないと私は思った。

(YFIIスキー旅行)



いじけなかつたのだ。つまり授業への主体性を失い、また自分が想像していた交友関係と実際のそれとのギャップにもどかしさを感じていたのだ。原因を他に求めるのは簡単だ。私が派遣されたチューリッヒ有数の進学校のイタリア語専攻のクラスで、個人主義と主体性に基づく組織では私の立場は中途半端だった。またプライベートを大切にする国民性に加えて、学校では授業の時間以外は外出してもいいというような自由なシステムが、それと対極な「日本の」教育を受けた私には身に余るものだったのだ。その異文化に理解はあっても順応するまでに長い時間がかかった。

(所属したクラス4D)



それまでに私は彼らをそつけない人だと決めて、自分はクラスメートとの交友関係がうまくいっていないのではないかと疑心暗鬼になり、その原因を外に設けることで自分を正当化し自縄自縛になっていた。

(理科室でクラスメートと)



だから読み飛ばさないでほしい。それを最終的に解決したのは時間と挑戦し続けることだった。つまり上記の原因をただの文化的な差異、いわゆるカルチャーショックなど体に染み込むまで言い聞かせ、そのうえで腐らずにその地域の文化に自分を合わせて地道

に主体的に行動し続けることだ。効果が出るには時間がかかることを留意することだ。自分で作った壁は自分で越えるしかない。私はこのような挫折を乗り越えた後は風休みに友達と湖で泳いだり、放課後に公園でバーべキューをしたり楽しく学校生活を送った。そんな日の帰り道はうれしくて一人で笑いながら泣いた。

(同じ高校の留学生仲間達と)



まとめに入る。私が考える高校生で留学する意義を三つ挙げる。一つ目は、留学に限つたことではないが社会的に失敗がまだまだ許

されているからだ。

二つ目は、多感かつ知識の少ない今だからこそ知識に邪魔をされずに物事を主客未分の純粹経験としてとらえられることだ。私たちはまだまだ既成概念や偏見なしにありのままを素直に受け入れることができる。例えば私は保守派のイスラムの大人たちがいぶかしげる移民問題や宗教対立などに疎かだったおかげで色眼鏡なしに紛争を抱える国から移民してきた家族の友達や同性愛者の先生と純粹に接することができた。

三つめは、新しい視点を多感な時期に留学で得たことで自分や自国の文化などを、それらの視点を行き来することで外から見比べられるということだ。例えばイスラムではないユダヤ教文化として、日本の学校では先生がランダムに選んだ数字などで指名した生徒に問題を答えさせる風習や、修学旅行での班行動や頭髪検査などがあるが、なぜそのような風習が生まれたのかなどを考えてみると面白い。それらを多面的に考えるとそれらに通底する一つの傾向が見えてくる。

さて、私は留学でたくさんの人々に支えられた。その恩を少しでも返そうと張り切ってこの春に世界中からYFUで日本に留学する高校生を支援する東京での泊りがけのボランティアに参加した。「大きな初仕事を前にとても緊張している」と、数日前にイスラムのホストファミリーにメールを送つたら、とても長い励ましの文章が返ってきた。東京行きの高速バスの中でそれを読みながらホストファミ

リーと一緒に過ごした一年間が色鮮やかに、においてや感情まで絡みついて目の前に浮かんでき泣けた。そして勇気をたくさんもらつた。気が付けばまた支えられていた。窓の外には二年ぶりに見る、桜が咲き始めていた。

### (雪のドレスデン)



小林佳晃君の「留学体験記」は、前号に寄稿を予定していたのだが、誌面の都合により今号での掲載となつた。



### 《図書委員会前期役員紹介》

図書委員会の前期役員は左記の通り。

★★★図書委員長	・・・高3B	森田哲人
★★副委員長	・・・高2BA	吉川優人
★★副委員長	・・・高2GB	長谷川翔太郎

■展示班	班長	・・・高3C
	副班長	・・・高2H

■蔵書点検班	班長	・・・高3B
	副班長	・・・高2F

■図書館だより班	班長	・・・高3E
	副班長	・・・高2F

■松橋本好史	千葉田好史	伊藤優希
	武照瑛	仲宜希



2015年度(昨年度)年間貸出冊数

中・高生利用冊数	14,060冊
教職員等利用冊数	712冊
合計	14,772冊
本年度は20,000冊を目指し、積極的な図書館活動を開催します!	